「東照大権現像」の変遷と定型化の検討

浦木賢治（静嘉堂文庫美術館）

神格化した徳川家康を束帯姿で描いた「東照大権現像」は江戸時代を通じて多数制作され、現在でも各地の寺社等に所蔵されている。絵仏師四代木村了琢による「東照大権現像」（徳川記念財団蔵。以下、「徳川本」）が最初期作と評価され、その類例には「来迎寺要書」により寛永十四年までに制作されたと考えられる聖衆来迎寺本、長圓寺二代目住持の「校割帳」から寛永二十年以降に寄進されたと推定される長圓寺本、寛永寺寒松院伝来の伝承を持つ京都大学総合博物館本（以下、「京大本」）がある。先行研究により、いずれの作例も袍の裾を左に流すグループに分類されるが、徳川本と他三作の十分な比較検討は行われていない。本発表は上記「東照大権現像」四点の背景の景観を比較し、図様の変遷を考察、その定型化の過程を推察し、長圓寺本・京大本と後に普及した「東照大権現像」の類似を指摘する。

上畳に坐す東照大権現の背後に描かれた景観は、山中に木造多宝塔、入母屋造の拝殿、唐門を描くことから、元和期に建造された日光東照社奥社と考えられる。元和期の日光東照社奥社の全容は詳らかではないが、寛永十八年、家康の墓標とされる木造多宝塔は石造に改められ、木造多宝塔と奥社拝殿はともに上野国世良田村（現、群馬県太田市世良田）の地に移築された。このことから「東照大権現像」に描かれた景観は、木造多宝塔が石造に改築された寛永十八年以前のものを表す。世良田東照宮として唯一現存している元和期の奥社拝殿と「東照大権現像」に描かれた拝殿を比較すると、桁行や千木の有無が異なり、実際の日光東照社奥社の建造物を正確に描いたものとは言い難い。徳川本と聖衆来迎寺本の景観を比較すると、背景の左右に境内が広がる構成は両作にのみ指摘できる共通点だが、徳川本には三重塔が描かれ、聖衆来迎寺本には石鳥居が描かれる点や拝殿の柱間の数などが異なる。長圓寺本と京大本には三重塔が描かれず、石鳥居が配され、拝殿の桁行が六間である点も聖衆来迎寺本と共通する。一方、長圓寺本と京大本が聖衆来迎寺本と異なる点に、諸建造物を抱く山容を画面右に寄せ、画面左に水墨による風景を描き加える点、拝殿に蔀戸を加筆する点などを挙げることができる。以上の四作の景観構成、モチーフ描写の比較検討から、徳川本、聖衆来迎寺本、長圓寺本と京大本という図様の変遷を想定することができる。

後世の「東照大権現像」には背景を左右に二分し、画面向かって右に山水や楼閣、左に水辺の景観を描く作例が多く、このような景観構成の祖型に長圓寺本や京大本を位置付けることができ、両作を「東照大権現像」の定型化の始まりと考えることも可能だろう。